5課

10月29日

十字架以前の復活

安息日午後 10月22日

暗唱聖句

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」（ヨハネ11：25、26、新共同訳）

イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。（ヨハネ11：25、26、口語訳）

今週の聖句

ユダ9、ルカ9：28～36、列王記上17：8～24、ルカ7：11～17、マルコ5：35～43、ヨハネ11：1～44

今週のテーマ

旧約聖書の復活に関する記述は、これまで学んできたように、個人的な期待（ヨブ19：25～27、ヘブ11：17～19、詩編49：16〔口語訳49：15〕、詩編71：20）と将来の約束（ダニ12：1、2、13）に基づいて言及されています。しかしながら、私たちは、実際に死からよみがえった人々の記録を見ることができます。

最初の復活はモーセでした（ユダ9、ルカ9：28～36）。イスラエルの王政時代には、サレプタのやもめの息子（王上17：8～24）とシュネムの息子（王下4：18～37）が復活しました。キリストは、地上で肉体をお取りになられたとき、ナインのやもめの息子（ルカ7：11～17）、ヤイロの娘（同8：40～56）、そしてラザロ（ヨハ11章）を復活させられました。モーセを除いて、これらの人々は、いずれは死すべき者としてよみがえりました。これらの出来事は、死者の無意識についての聖書の教え（ヨブ3：11～13、詩編115：17、詩編146：4、コヘ9：5、10）を裏づけています。また、これらの記述や他の聖書の復活の物語のいずれにおいても、死後の世界についての言及はありません。

今週私たちは、キリスト自身の死と復活以前に起きた復活についてより詳しく学びます。

日曜日　10月23日　モーセの復活

問1　ユダ9とルカ9：28～36を読んでください。これらの聖句にモーセの肉体の復活についてどんな証拠を見ることができますか。

アレクサンドリア学派のギリシア教父の中には、このように論じる人たちがいました――モーセが死んだとき、2人のモーセがいて、1人は霊において生きており、もう1人は肉体において死んだので、1人のモーセは天使たちと天に昇り、もう1人は地に葬られたと（オリゲネス『ヨシュア記講話』、アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』参照）。このような昇天する魂と埋葬される肉体の区別は、霊魂不滅のギリシア思想を信じる者たちには意味があるかもしれませんが、このような思想は聖書にはありません。ユダ9は、モーセの「肉体」の復活についての聖書の教えを追認しています。なぜなら、この論争は「モーセの遺体のこと」についてであり、生き残った魂についてではないからです。

申命記34：5～7は、モーセは120歳で死に、主は彼をモアブの地の隠された場所に葬られたと述べています。しかし、モーセは墓の中にそれほど長い間は留まりませんでした。「モーセを埋葬したみ使いたちを従えて、キリストご自身が天からおりてこられ、眠りについた聖徒を呼び起こされるのであった。……

このときはじめて、キリストは、死者に命を与えようとしておられた。いのちの君と輝く天使たちが墓に近づくと、サタンは自分の主権が脅かされるのを感じた。……キリストは、サタンと論争しようとはされなかった。……だが、キリストはすべてを天父にゆだね、『主がおまえを戒めて下さるように』と仰せになった（ユダ9）。……永遠に復活が確かなものとされた。サタンは自分のとりこを奪われ、死んだ義人はふたたび生きることとなった」（『希望への光』248、249ページ、『人類のあけぼの』下巻95、96ページ）。

モーセの復活の明らかな証拠は変貌の山に見られます。そこにはモーセが、死を見ずに移された預言者エリヤ（王下2：1～11）と共に現れました。モーセとエリヤはイエスと語り合いさえしました（ルカ9：28～36）。「見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」（ルカ9：30、31）。モーセの姿は、キリストの来（きた）るべき罪と死に対する勝利の証拠として、誤ることのない言葉で描写されています。それは、イエスの前に現れたモーセとエリヤであって、彼らの「霊」ではありませんでした（何しろ、エリヤは死んでいなかったのですから）。

月曜日　10 月 24 日　旧約聖書の二つの復活

問2　列王記上 17：8～24 と同下 4：18～37 を読んでください。これらの復活の共通点と相違点は何ですか。

ヘブライ11章には、「女たちは、死んだ身内を生き返らせてもらいました」（ヘブ11：35）とあります。これは今日学ぶ二つの復活の出来事を指しています。

初めの復活（王上17：8～24参照）は、アハブ王とその異教の妻イゼベルの影響下で起こったイスラエルの大いなる背信の時代に起きました。深刻な干ばつが襲ったとき、神はエリヤにイスラエルの外にある町サレプタに行くように命じました。そこで彼はある貧しいフェニキア人のやもめと会います。彼女は、息子と自分のために、死ぬ前の最後の食事の支度をしていました。しかし、干ばつが終わるまで小麦粉と油は尽きることなく、その奇跡によって2人の命は長らえました。それからしばらくして、彼女の息子は病気で死にます。絶望のうちに彼女はエリヤに懇願し、彼が主に祈ると、「主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子どもは生き返った」（同17：22）のでした。

二番目の復活（王下4：18～37）は、ギルボア山の南の小さな村シュネムで起きました。エリシャは貧しいやもめが借金を支払うために、たくさんの器を油で満たす奇跡によって彼女を助けました（同4：1～7）。その後、エリシャは子どものない裕福な既婚婦人とシェムネで会います。彼女に子どもが生まれると預言すると、その通りになりました。子どもは健康に恵まれ成長しましたが、ある日病気で亡くなってしまいました。婦人はカルメル山に行き、エリシャに一緒に来て息子を見てくれるように頼みます。エリシャが主に熱心に祈ると、ついに少年は生き返りました。

これらの女性たちは、背景は違っていましたが、同じ救いの信仰を持っていました。フェニキアのやもめは、預言者エリヤがイスラエルのどこにも彼にとって安全な場所がない極めて困難な状況にあったときに彼を迎え入れました。シュネムの婦人と彼女の夫は、預言者エリシャがその地方に来たときに泊まれるように特別の部屋を作りました。2人の子どもたちが亡くなったとき、信仰深い母親たちは神の預言者に訴え、子どもたちが生き返るという喜びを味わいました。

これらはどちらもすばらしい物語です。しかし、このような奇跡が起こらなかった人々がどれほどいることでしょうか。この悲しい事実は、終わりの時の約束の復活が、どれほど私たちの信仰の中心的なものとなるでしょうか。

火曜日　10月25日　ナインのやもめの息子

聖書は、「イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです」（使徒10：38）と言います。事実、すべての福音書は、イエスが多くの助けを必要とする傷ついた魂に仕える記事で満ちています。それは、後に多くのユダヤ人が、イエスが約束のメシアであると信じるようになった理由となりました。

「こうしてあらゆる病気をいやしながら、村々をお通りになったので、村中誰一人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでした。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのです。イエスが人となられたのも、人間の必要に応じることができるためでした。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、イエスに近づくことを恐れませんでした。また幼い子供でさえ彼にひきつけられ……るのでした」（『希望への光』1936ページ、『キリストへの道』改訂第三版11、12ページ、一部改訳）。

問3　ルカ7：11～17を読んでください。この復活と昨日学んだ復活との間にはどんな重要な違いがありますか。

ガリラヤでの宣教の間、イエスは病人たちをいやし、悪霊を追い出されました。ある時、イエスと彼に従う者たちがナインという町の門に近づくと、葬列がその門を通るところでした。開かれた棺（ひつぎ）の中には、あるやもめのひとり息子が入っており、彼女は慰めようもないほどに嘆き悲しんでいました。イエスは悲しむ母親を深く憐れんで、「もう泣かなくともよい」、そして「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われます。「すると、死人は起き上がってものを言い始め」、「イエスは息子をその母親にお返しになった」のでした（ルカ7：13～15）。イエスのご臨在が、そのシナリオを丸ごと変えたのです。そして、その奇跡を目撃した多くの人々が、驚くべきことが起きたのを知っただけでなく、（彼らが「大預言者」と呼ぶ）特別な方が彼らの中におられるのを知ったのでした。

フェニキア人のやもめ（王上17：8～24）とシュネムの婦人（王下4：18～37）は、それぞれエリヤとエリシャに助けを求めました。しかし、ナインのやもめは願うことさえせずに助けられました。これは、私たちが神に助けを求めることができないとき、あるいは求めても無駄だと感じるときにも、主が私たちを顧みてくださることを意味します。イエスは問題をご覧になると対処されました。――それはあらゆる働きにおいて、いかにもイエスらしいことでした。

水曜日　10月26日　ヤイロの娘

イエスの十字架以前の復活は、特定の民族や社会的階級の人々に限定されませんでした。モーセは、おそらくこれまでの神の民の中で最も偉大な指導者でした（申34：10～12）。対照的に、貧しいフェニキアのやもめは、イスラエル人でさえありません（王上17：9）。シュネムの婦人はその地域では裕福でしたが（王下4：8）、同じようにヘブライ人ではありませんでした。ナインのやもめには1人息子がいて、おそらく彼女はその息子を頼りにしていたことでしょう（ルカ7：12）。一方で、ヤイロは、会堂長であり、おそらくカファルナウムに住んでいました（マコ5：22）。文化的背景や社会的地位はそれぞれ異なりますが、彼らは皆、神の命を与える力によって祝福されたのでした。

問4　マルコ5：21～24、35～43を読んでください。「子供は死んだのではない。眠っているのだ」（マコ5：39）とのキリストの死についての御言葉から、私たちは何を学ぶことができますか。

ヤイロの12歳の娘は、死に瀕する病のために家で寝ていました。そこで、ヤイロは、イエスのところに行き、家に来ていやしの御手を置いてくださるよう懇願しました。しかし、一行が家に着く前に、「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」（マコ5：35）との悲しい知らせが届きます。その時、イエスは悲しむ父に言われました。「恐れることはない。ただ信じなさい」（同5：36）。事実、父親にできることは、神の介入に頼ることだけでした。

家に着くとイエスは、集まっていた者たちに言われました。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ」（マコ5：39）。彼らはイエスをあざ笑います。なぜなら、彼らは（1）娘が死んだのを知っており、（2）イエスの御言葉の意味がわからなかったからです。「『死』を意味する『眠り』という慰めの比喩は、この経験についてキリストが好んで用いられた表現であった（〔マタ9：24、ルカ8：52、〕ヨハ11：11～15参照）。死は眠りである。しかし、それは偉大ないのちの与え主のみが呼び覚ますことのできる深い眠りである。なぜなら、キリストのみが死と陰府（よみ）の鍵を持っておられるからである（黙1：18をヨハ3：16、ロマ6：23と比較）」（SDA聖書注解第5巻609ページ、英文）。

少女が復活した後、それを見た人々は、「驚きのあまり我を忘れた」（マコ5：42）とあります。不思議ではありません。この世にあって死は、最終的、かつ絶対的なもの、元に戻せないものに見えるからです。このような出来事を目撃したことは、人生を変えるような驚くべき体験だったに違いありません。

問5　ヨハネ11：1～44を読んでください。ラザロの病と死によって、イエスはどんな意味において「栄光を受け」（ヨハ11：4）られたのでしょうか。

ここでもイエスは死について語るときに、眠りという比喩を用いています。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く」（ヨハ11：11）。イエスが文字通りの眠りについて語られるときは（同11：11～13）、はっきりその意味を説明されます。「ラザロは死んだのだ」（同11：12～14）。実際にイエスがベタニアにお着きになったとき、ラザロが死んで4日も経っており、その遺体はすでに腐っていました（同11：17、39）。彼の遺体はすでに臭うほどに腐敗が進み、疑いもなく、**彼は死んでいたのです。**

このような状況の中で、イエスが「あなたの兄弟は復活する」（ヨハ11：23）と言われたとき、マルタは終わりの日の復活についての信仰を再確認します。しかしイエスは、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」（同11：23～26）と言い、さらに次のように付け加えます。「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」（同11：40）。マルタは信じました。そして兄弟の復活の中に神の栄光を見たのでした。

聖書は、神の御言葉によって命は創造され（詩編33：6）、御言葉によって命はラザロのように再創造されると言います。短い祈りの後に、イエスは、「ラザロ、出て来なさい」（ヨハ11：43）とお命じになりました。その時、そこにいた人々は、神の命を与える力を見ます。それは、この世界を創造した力と同じものであり、世の終わりの時に、復活し死者を生き返らせる力と同じものなのです。

ラザロのよみがえりによって、イエスは死を打ち負かす力をお持ちであることを証明されました。死から逃れられない存在である私たちにとって、これ以上大きな神の栄光の現れがあるでしょうか。

ヨハネ11：25、26を読んでください。25節でイエスは、信じる人は死ぬと言い、26節では決して死なないと言っておられます。イエスは何を教えておられるのでしょうか。この御言葉を理解する上で、死は意識のない眠りであるという理解は、なぜ非常に重要なのでしょうか。さらにイエスの御言葉は、いずれ墓に葬られる私たちにとって、なぜ大きな希望を与えるのでしょうか。

金曜日　10月28日　さらなる研究

参考資料として、『人類のあけぼの』第43章「モーセの死」、『国と指導者』第10章「罪を責める声」、第19章「平和をつくり出す人」、『各時代の希望』第32章「百卒長」、第36章「信仰のいやし」、第58章「ラザロよ、出てきなさい」を読んでください。

「キリストのうちには、借りたものでもなければ、ほかから由来したものでもない、本来の生命がある。『御子を持つ者はいのちを持』つ（Ｉヨハネ5：12）。キリストの神性は、永遠の生命についての信者の確信である。『わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか』とイエスは言われた（ヨハネ11：25、26）。キリストはここでご自分の再臨の時を予期しておられる。その時、死せる義人は朽ちない者としてよみがえり、生ける義人は死を見ないで天へ移されるのである。キリストがラザロを死人の中からよみがえらせることによって行おうとしておられた奇跡は、死せるすべての義人のよみがえりを代表するのであった。キリストはみことばとみわざによって、ご自分がよみがえりの創始者であることを宣言された。まもなくご自分が十字架上で死のうとしておられたキリストは、よみの征服者として死の鍵をもって立ち、永遠の生命を与える権利と権力とを主張された」（『希望への光』950ページ、『各時代の希望』中巻345、346ページ）。

話し合いのための質問

❶ キリストの地上での働きの期間と同じように、エリヤとエリシャの預言者としての働きの間にも多くの人々が亡くなりましたが、わずか数人のみが復活しました（ルカ4：24～27参照）。死者の状態について考えてみてください。過去の復活や再臨の時の復活にかかわらず、死者の状態について、違いがあるでしょうか。

❷ 幾世紀にわたって、多くの作家たちが、常に死によって終わる人生のはかなさについて書いてきました。鶏、ビーバー、牡蠣（かき）など他の被造物と同じように、人は皆死にます。しかし、人間の置かれた状況はある意味、動物よりも悪いと言えます。なぜなら、人は死ぬことを知っているからです（コヘ9：5）。鶏、ビーバー、牡蠣は、自分たちが死ぬことを知りません。なぜ、私たちにとって復活の約束は非常に重要なのでしょうか。

❸ もし霊魂が不滅であり、死者、特に正しい人が死後、天で生きているとするなら、世の終わりの時の復活にどのような必要性があるのでしょうか。